奈良県立万葉文化館蔵『萬葉集玉の小琴』解題

阪口　由佳

【書誌情報】　（貴重書番号：ロ1）

［体　裁］写本、袋綴、四目綴、一冊

［表　紙］縹色　題簽「萬葉集玉の小琴　全」

［料　紙］楮紙

［寸　法］縦二七・八cm　横十九・四cm

［行数等］十一行　墨付五十三丁

［書写年］不明

［蔵書印等］表紙右上に「第百三拾九号／凹邨文庫／全壹冊」の貼紙、右下に㋐4／5のシール。見返しに①「橿原文庫」の印、②「橿原文庫蔵書印／44.8.10／第27249号」の印。裏見返しに①「大和歴史館印」の印、②「館蔵56」の印（注1）

【解説】

『萬葉集玉の小琴』は、本居宣長（一七三〇～一八〇一）による万葉集の抄出注釈書。師である賀茂真淵の『万葉考』を補訂する目的で、万葉集巻一から巻四までの語句を摘出し、注解を加えた。本巻（巻一～巻三）と別巻（追考・巻四）があり、序によると本巻は安永八（一七七九）年に成立したことがわかる。宣長没後の天保九（一八三八）年まで出版されなかったため、多く写本として流通していたことが知られる（注2）。

当館所蔵の写本『萬葉集玉の小琴』（以下当館蔵本）には奥書がなく、書写年・筆者は不明である。本居宣長記念館所蔵自筆稿本（以下宣長本）（注3）と比較すると、字配り（文字数・行数）や書き方（注釈本文中の漢字・ひらがなの使い方）は異なるものの、内容は概ね宣長本に一致する。ただ、宣長本にない貼紙や頭注が付されており、当写本の年代推定や経歴の参考となる。付加された六カ所を概観しておきたい（／は改行、□は読めなかった文字を示す）。

①6丁オ頭注（墨）　「□□（虫損）に張紙あり云／四来三ヨクミツトヨム／ヘシ此書未改す□言／申入す　見よの心は／あた古人見つと云／事云々□詞也」

万葉集巻一・二七番歌の末尾「四来三」について、宣長本では右に「ヨクミ」、左に「ミツ」の訓を付す。当館蔵本は右に「ヨクミツ」の訓を付しており、頭注の「ヨクミツトヨムヘシ」はこの訓の補足である。なおこの訓は荷田御風の説であることが本居大平書き入れの万葉集（注4）からわかる。

②8丁オ貼紙（墨）　「□□云　そむるはふといふはのはふの下にるもしあるへし」

万葉集巻一・三八番歌「山川母　依弓奉流」の「奉流」について、「つかふる」と訓むことの説明が本文にあり、最後に「まれに時雨の雨の染る也けり、峯まで延る、などあるは、染有、延有の意にて、そむる、はふといふとは異也」と書かれている。傍線部分について「そむる、はふる」であるべきと補足された付箋である。

③11丁オ頭注（朱）「弘綱云　之ハ乏（シ）の／誤りにてトモシキロ／カモ也　宣長大人／も後に考られ／たり」

万葉集巻一・五三番歌の結句に関する頭注である。弘綱は佐佐木弘綱（一八二八～一八九一）と思しい。ここのみ朱書きであり、後に追加されたと考えられる。

④35丁オ貼紙（墨）「△よむべきやうの言なれ共十五ノ卅五丁にむかひゐて一日もおちず見しかども伊等波奴伊毛乎月渡るまて／とあるを以てみればいとはぬと訓へき也　されと又十一ノ四十三丁にあけぬべく云々君が手枕未厭君これは／いまたあかなくにとならでは訓がたけれは不厭もあかざるとよまむもあしからじ」

傍線を付したとおり「不厭」の訓に関する注である。万葉集巻三・二九一番歌と二九八番歌の間に貼られているが、いずれの歌も「不厭」に関係しない。巻四・四九五番歌の「不厭」についての付箋（注5）が本巻に混入したものと思われる。宣長本「玉の小琴」別巻（注6）の巻四・四九五番の部分に、全く同じ注が付箋として付されている。当館蔵本の書写者は別巻も写していた、少なくともある時期に本巻・別巻が同時に所蔵されていたことが想定できる。

⑤37丁オ頭注（墨）「一本に牟閇これ也の下／不相はまた実のならさる／にて思ふ人にあはぬを／よせていふ也恋の歌也／又うへは諾（ウヘ）にても有／へしと云へり」

万葉集巻三・三三〇番歌「久美宇倍」について、宣長本では見せ消ちの脇に新説が書き入れられており、この新説が当館蔵本の頭注と一致する。当館蔵本の本文部分では、宣長本で見せ消ちにされた部分（旧説）が写されている。すなわち、当館蔵本の本文の書写者が見た本には旧説のみが書かれていたこと、頭注が「一本に」と始まることから、新説が書かれた本で校合し頭注を追記したことが知られる。

⑥41丁オ頭注（墨）「敏按、潤湿ヲ月竢トナホシタルハ東満ナリ」

万葉集巻三・三七〇番歌「潤湿跡」について、本文に「或人此句を誤字として、つきまつと、とせれ共」とある。この「或人」が荷田春満であるという頭注である。注の最初「敏按」の「敏」は小篠敏（注7）（一七二八～一八〇一）であろう。

以上、頭注・貼紙から当館蔵本の特徴を考察した。当館蔵本の本文は、宣長が本巻の三三〇番歌に新説を書き入れる前の本によって書写され（⑤）、その人物は別巻も書写していた可能性がある（④）。その後、小篠敏による注が追記され（⑥）、さらに③の朱書きが加筆されたと推定する。検討が及ばなかった点も多いが、以後の課題

としたい。

【注】

注1　大和歴史館（戦前は「大和国史館」）については、『万葉図書・情報室だより』40号（奈良県立万葉文化館　二〇一四年十二月）、竹内亮「「万葉文化」の血脈（連載「博物館って楽しい！」奈良県立万葉文化館）」（『月刊奈良』61－2（通巻635）二〇二一年二月）など参照。大和歴史館の蔵書が橿原文庫に受け継がれ、当館に移管された。

注2　大久保正「解題」（『本居宣長全集　第六巻』筑摩書房　一九七〇年）。

注3　本居宣長自筆稿本（本居宣長記念館所蔵）を底本として復刻した、「萬葉集玉の小琴」（前掲注2所収）を参照した。

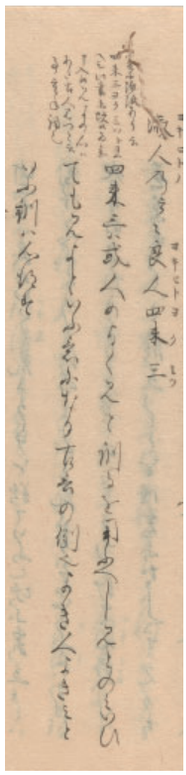
注4　『東京大学国文学研究室所蔵本居文庫目録』0843番の万葉集版本。寛政二十年刊。

注5　版本は宣長の補訂が施される前の本の写本を底本としており、この付箋は版本に反映されていない（前掲注2「解題」）。

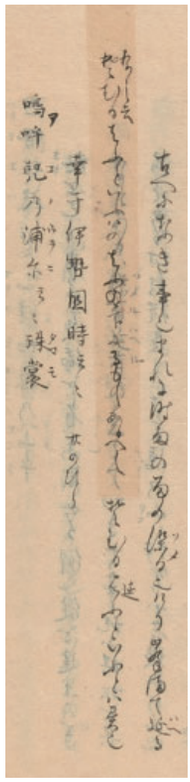
注6　別巻の完成時期は明らかでないが、一七八二年以降、一七九四以前であると考えられている（『本居宣長事典』東京堂出版　二〇〇一年）。

注7　一七八〇年宣長に入門、浜田藩（島根県）国学の中心（前掲注6『本居宣長事典』）。九州国立博物館所蔵『万葉和歌集』（小篠敏書入本）にも、同じく「敏按」から始まる書入れが多数ある（九州国立博物館収蔵品ギャラリー　https://collection.kyuhaku.jp/gallery/13516.html　二〇二五年二月二〇日閲覧）。本写本の⑥頭注と同筆か否かの断定はできないが、私見では類似する。

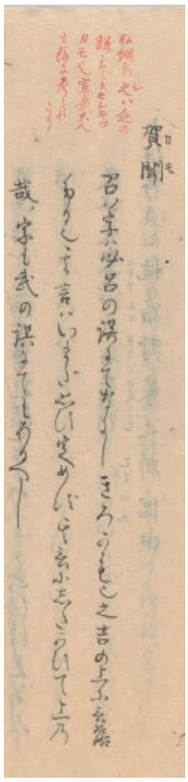
【画像1】当館蔵『萬葉集玉の小琴』表紙



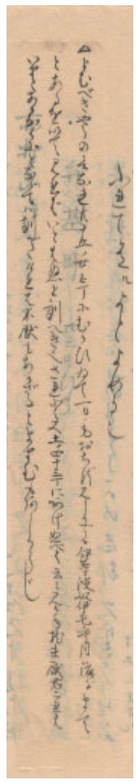
【画像2】 当館蔵『萬葉集玉の小琴』6丁オ（部分）



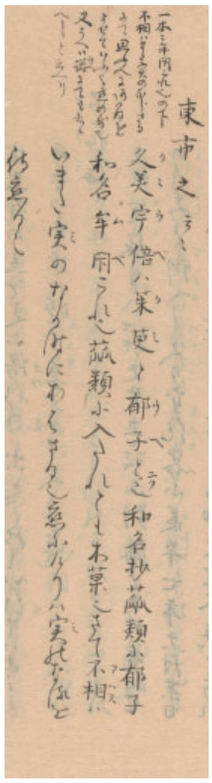
【画像3】 当館蔵『萬葉集玉の小琴』8丁オ（部分）



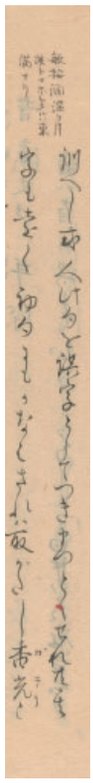
【画像4】 当館蔵『萬葉集玉の小琴』11丁オ（部分）



【画像5】 当館蔵『萬葉集玉の小琴』35丁オ（部分）



【画像6】 当館蔵『萬葉集玉の小琴』37丁オ（部分）



【画像7】 当館蔵『萬葉集玉の小琴』41丁オ（部分）